

## 母親が子どもに抱く否定的感情に関する臨床心理学的研究

－感情的に叱った後の心の変化と子どもとの関係の深まり－

心理臨床学専攻 渡 邊 理 恵

### 【問題と目的】

近年の社会変動とそれに伴う女性の意識はきわめて大きく変化し、女性にとって母であることがもつ意義や価値観は大きく揺らいでいるといえる。かつてのように女性の人生が結婚して子どもを産む事に限られていた時代とは異なり、母であると同時に、妻として、社会人として、夫婦関係や社会生活に期待するものも大きくなっているといえる。しかし母性に対して人々が抱くイメージは従来の母性観と大差がなく、あたかも女性は無条件に母であることに究極の至福を感じるものだと考えられている。確かに育児は素晴らしい経験であり、多くの喜びと発見を分かち合う営みである。それは過去から現代に至り変わらない事実であると考ええる。しかし、男女平等を保障する憲法下で、自我の確立を尊重する教育を受けた現代女性にとって、社会との接点を持ちつつ、自分らしく行きたいという考えは当然の要求ではないだろうか。

そこで本研究では、母親の子どもに対する否定的感情に注目し、「育児に伴う日常お母さんの気持ちアンケート」を行なう。その結果、第1に感情的に叱る頻度や叱り方の実態を把握する。第2にそのエピソードの後、母親がどのような自分の感情を認識しているか把握する。第3にそのエピソードの後、子どもとどのような様に向き合うのか把握する。第4にそのエピソードをきっかけにして、子どもとの関係の変化をどのように認識しているのか把握する。また育児に関する自由記述の分析から育児に伴い誰にどのような手助けを求めているか、また育児について思うことの確認を行った。これらの結果は、子育て支援の大きな柱の1つである児童虐待防止対策における、「育児不安や虐待の早期発見心理相談」として、特に母親の育児不安に対して現実に即した心のケアの一助となり、結果

的に児童虐待の防止へと展開できることを目的とする。

### 【研究仮説】

1. 子どもを可愛いと感じながらも、同時に子どもを感情的に叱り、育児を否定したくなる体験が多くの母親に見られるであろう。そして、感情的に叱った後、罪悪感からそのことをストレスに感じている母親も多く見られるであろう。
2. 子どもに対して感情的に叱った後、子どもと向き合うことで、子どもとの心の交流を深めたり、母親が反省することで、より良い育児方法（叱り方）を獲得しているであろう。また、その結果、母親のストレスは幾らか軽減しているであろう。
3. 母親の多くは、育児に対して大きな不安を抱えながら、閉塞感の中で葛藤しながら育児に当たっているのではないかと。そして、多くの社会的手助けではなく、身近な夫やその他の家族の少しの育児・家事支援を求めている人が多いであろう。もしくは、社会的に評価されない母親としての自分の話を聴き理解してもらいたいと考える母親も多く見られるであろう。

### 【研究方法】

1. 対象者：鹿児島市在住の幼児期（0歳～6歳）にある子ども（保育園、または、幼稚園に在籍中）の育児に当たっている母親504名。
2. 調査方法：独自に作成した質問紙（育児に伴う日常のお母さんの気持ちアンケート）
3. 配布と回収方法：直接園長もしくは責任者に研究の主旨を文章にて説明し、質問紙の配布及び回収について依頼する。2週間で回収に出向く。
4. 実施期間：平成18年5月15日～7月14日

### 【結果】

1. アンケート回収率（回収率73.8%）N=115
2. 統計解析結果

- 1) 育児否定を抱く母親は「いつも」が4.3%  
「時々」が65.2%であり全体の7割を示す。
- 2) 感情的に叱った後罪悪感から「苦」に感じている人は「いつも」が12%、「時々」が59%であり全体の7割を示す。
- 3) 子どもと向き合うことで、「苦」は軽減する人は「いつも」が38%、「時々」が43%であり全体の8割を示す。
- 4) 感情的なことばによる叱り方
  - ①欠点をあげつらう：96%
  - ②以前のことをむしかえす：46%
  - ③怒鳴る：50%
  - ④出て行けという：90%
- 5) 感情的な行動による叱り方
  - ①物を投げる：40%
  - ②叩く・蹴る：10%
  - ③追い出す：54%
- 6) 感情的に叱った後の母親の気持ちの因子分析  
バリマックス回転後の因子負荷量が0.5に満たない2項目は削除した。その結果2つの因子が抽出された。  
第1因子— 自己反省因子  
第2因子— 対象（子ども）否定因子
- 7) 感情的に叱った後、子どもとの関係の深まりの因子分析。バリマックス回転後の因子負荷量が0.5に満たない1項目は削除した。その結果2つの因子が抽出された。  
第1因子— 心の交流の深まり因子  
第2因子— 育児方法の見直し因子
3. 自由記述の分析結果（グラウンデッド・セオリー・アプローチを参考に分析）
  - 1) 誰に育児支援を求めるか  
夫・家族：66% 専門家：19%
  - 2) どんな支援を求めるか  
家事・育児の手伝い：58%  
精神的理解者を求める：20%
  - 3) 育児に関して思うこと
    - ① 育児肯定群：36%
    - ② 育児葛藤群：28%
    - ③ 育児否定群：36%

### 【考察】

鹿児島市に在住し保育園もしくは幼稚園に預ける乳幼児をもつ母親は、子どもに湧き上がる愛情を抱きながらも、かなりの頻度で感情的に子どもを叱りそれが罪悪感となっている。そして感情的に叱った後子どもに自分の気持ちを語り、謝ったり、説明したり、反省を促したりしながら子どもと心の交流を深めながら育児方法の見直しを行なっている。そして育児支援は、身近な家族である夫に助けを求めている人が多く、それは直接に家事や育児を手伝って欲しいという内容が大半を占めている。加えて育児に伴う迷いや不安を共有し、自分の存在を認めて欲しいという精神的支えを望む声も想像以上に多く見られた。この少子化の時代に、男性も女性も自分という個人の生き方を尊重しながら、父親として母親として相互に自分の中にある男性性と女性性を発揮する時である。そして、家庭だけでなく社会にとっても貴重な子どもたちを、健康に健全に守り育てていく重要な役割があると考ええる。育児においては、生物学的に母親に代われない絶対的領域は当然存在する。しかし本研究において明らかとなった母親の育児否定感や葛藤状態の実態を貴重な情報として受け止め、決して母親をあるべき論で苦しめることなく社会構造の変化に応じた子育て支援を心理士として具体的に展開していきたいと考える。ただ、母親に対して多くの支援が注がれる必要性は認識されなければならないが、母親自身の育児観の未熟さ、父親の非協力的態度にこめられた男性の未成熟さと横暴さ等が顕著に見られるケースも多くある。「母親も人間だから」とか「自分を犠牲にしたくない」という理由から、子どもの自然な要求にも苛立ちを向けることが正当化されてはならない。親となる以前の思春期から、自我の確立や男女対等なパートナーシップを育成する教育の機会的重要性を感じる。つまり男性も女性も「人間としての成熟のあり方が問われる時代」としての子育て支援を考え、具体的な心理支援を展開しながら共に人間的成熟を目指すことができればと考える。